

日本の民間薬 —その58—合歓皮(ゴウカンヒ)

千葉大学環境健康フィールド科学センター 池上文雄

「基原」

ネムノキ(合歓木: *Albizia julibrissin* Durazz.)の樹皮を乾燥したもの。

ネムノキは、東北地方以南の山地の林縁、原野などの日当たりのよい湿地に自生するマメ科(Fabaceae)の落葉高木で、中国、東南アジアなどにも分布し、栽培もされる。日本が北限とされる。樹高6~9m、樹皮は黄灰色から暗灰色で、皮目が目立つ。葉は柄があり、長さ20~30cmの2回羽状複葉で互生する。7~8月、小枝の先に花柄を出し、散形状の花序をつけ、紅色の花が10~20集まって咲く。この紅色の糸状のものは雄しべで、花は夕方に開花する。結実期は8~10月、扁平な豆果で茶褐色に熟す。川に沿った場所に特に多く見られるのは、水によって種子が運ばれる故と思われる。和名は、葉が昼夜の明暗によって就眠運動を起こし、暗くなると眠るように葉と葉を重ねて閉じることに由来する。万葉の頃にはネブと呼ばれた。中国では合歓樹あるいは夜合樹と呼ばれている。

花期の頃に樹皮を採取し、水洗いしてから天日乾燥して適当な長さに刻み、これを合歓皮(ゴウカンヒ)と称して用いる。

「来歴」

神農本草経の中品に合歓とある。「本草拾遺」で合歓皮(ゴウカンヒ)と記載されるが、基原植物のネムノキ(合歓)は「千金方」では黄昏^{きゆうこん}、「図経本草」では夜合^{やごう}などと記載されている。かつて日本では、ニシキギ科マユミの樹皮を合歓皮の代用とした。今日、我が国では食薬区分において食品扱いである。

夏7月頃に夢のような花を開くネムノキは、「合

歓大樹花ほうほうと紅きかな」(螢泣)と謳われた。

「成分」

樹皮にはトリテルペン系サポニン(多数のジュリプロシド類)、フラボノイド(ゲラルドン、イソオカニン、ルテオリンなど)やタンニンなどを含む。

「薬理・毒性」

本品の薬理は不詳だが、同属植物のエイジュ(*A. chinensis*)の樹皮に含まれるサポニンのアルビトシンには動物実験での子宮収縮作用の報告がある。合歓皮は解鬱効果(大脳皮質の興奮)があるので使用されるが、効力は微弱で長期間連続服用してはじめて効果がある。その他、打撲による腫脹・疼痛に用い、特に関節や筋肉の慢性疼痛に適用する。毒性はないと思われるが不詳。

「薬効と主治・用法用量」

神農本草経の中品に収載され、味は甘、性は平。帰経は心・肝で、疎肝・安神・止痛の効能があり、漢方では不安感やうつ状態、不眠、腫れ物、打撲などに用いるが、主に不眠・抑うつ状態・胸が苦しい・食欲不振などの症状がある神経衰弱に用いる。本草綱目では血を和ませる、腫れを消す、止痛すると記載される。

日本の民間療法では、関節炎、腰痛、利尿、浮腫み、強壯に乾燥樹皮10~15gを1日量として水600mLで半量まで煎じて3回に分けて服用する。腫れ物や打撲傷、関節痛には煎じ液で患部を冷湿布したり、浴湯料として使用するとよい。また合歓皮の黒焼きと黄柏末とを酢で練り合わせて患部に冷湿布する方法もある。江戸時代からあ